

甘い関係

甘い関係

田辺聖子

／田辺聖子／文藝春秋



甘い関係

九八〇円

一九七五年二月一日 第一刷
一九七八年六月十五日 第四刷

著者 田 辺 聖 子

発行者 桜 原 雅 春
発行所 株式会社 文 藝 春 秋

(102) 東京都千代田区紀尾井町三
電話(〇三)二六五—二二一

本文印刷 理想社印刷所
付物印刷 凸版印刷
製 本 加藤製本

万一落丁乱丁の場合はお取替え致します

△長編小説▽

甘い関係

内容目次

身の下相談

7

——「女の子って、いつも、襲われたがっとなのん、ちがうのかいな……そんなこと、おまへんか」彩子は怒り心頭に発する眼つきで青年を……

ワリカン独立

63

——「まあ、女心なら、ちょいちょい、とノリで貼って修繕したら元通りになるのんちがうか」「よくもよくも、人ごとやと思うて……」

心がわり

76

——（島中トモ代も北林もなんだろう。金もないくせに、世の中なめてるわ。結婚なんてできてると思ってるの、あんな、金もない男と）

女の野心

113

——町子と男は近づいて、ふざけるようにもつれあいながら、ひらりと一つの影になり、しっかりと、抱擁しあっている。「あっ……」

可愛い男

149

——（私はいやらしい女かもしれない。私は自分で思っているより、物すごく好色な女かもしれないわ）などと、美紀は思うのであった。

冬の虹

184

——「女も、夜なかに眼がさめてひとり」というのんと、下着に凝るようになったら、オールド・ミスとして一人前やで」と美紀は……

ムチとアメ

217

——紅谷の妻は号泣しながら、町子の髪をつかんであおむかせる和平手うちをくれた。「夫婦のことが、あんたらみたいな人間に……」

夜のラーメン

241

——一年にいったんぐらいは、正直にものをいうても、バチは当れへんやろ、と思い、度胸をきめて、「淋しい」と、ハッキリいった。

雪

花

——「会うたげなさいよ、これからさき、どこではたッと顔会わす
か分らへんのに、そのとき挨拶もせんとすますも、けったいやろ」

281

男

と

女

——「なんで分るんですか。あたしの話が知れてるって、あんた、い
えるの?」「子供がおとなの話に首つっこむものじゃありませんよ」

310

春

に

——「ええわ。たとえ、ひと月でもたのしかったら値打あるのんち
がいますか? 全人生と引きかえたひと月で、高い値打やと思うわ」

356

装幀 四谷シモン
写真 篠山紀信

甘い 関係

身の下相談

彩子はアパートへ入ると、右手のエレベーターが下りてくるのを待った。

アパートといっても、分譲のマンションで、建物も贅沢である。しんとして、音もなく、住人の影も見えない。廊下からは、近くの大阪城が見える。

さえざえとした、ヒヤシンス色の秋空で、今日はスモッグも吹き払われているせいか、城の天主閣の瓦や白壁が、えもいえず美しく澄んで見えた。

エレベーターのドアが開いた。

彩子のあとから、急ぎ足でとびこんできた青年が、間に合った。ふたりきりで扉は閉まる。エレベーターは昇天する。彩子は青年と同じ八階だった。

どちらも箱の中で平行してドアに向っていた。

青年の眼が無遠慮に、彩子をじろじろ見つめているのが分る。

エレベーターの箱というのは、妙なものである。

しばらくのあいだ、その箱にあるかぎり人は他人同士でなくなる。袖ふれ合うも他生の縁ど

ころか、互いに命を何本かのロープに託し合った、一蓮托生の、戦友である。同志である。

ほんの、一瞬、おんなじ箱に乗り合わせた他人同士が、場合によっては、親子兄弟よりも、縁がふかくなるかもしれないのである。

途中で停電したり故障したりしたときのことであるが、まあ、めったにあることではないので、箱がストンととまってドアが開かれると、人は左右に散ってゆく。

当り前といえ、当り前だが、奇妙だな、と思うと、ヘンである。

「ノロいですな」

青年が話しかけた。

エレベーターはゆっくりゆっくりとつりあげられてゆく。そのスピードをいったのだろう。数字が、3、4、5……とスローモーに点滅する。

「ヘンなものですな」

と、また、青年はいった。

「こうやってお互いにエレベーターに乗り合わせて、ふたりきり、なんてのは考えるとけつたいですな」

彩子が考えていたのと同じことをいうのである。

「いわば密室ですからな」

青年は痩せていてのっぽで、女としては低くない方の彩子を、ゆうゆうと眼の下に見下すことができる高さである。

うすく色のついた眼鏡をかけていて、朽葉色のシャツに黒っぽい色のズボンをつけている。口

元をゆがめて、

「……ハ、ハハハ」

なんて笑われると、彩子は急に鳥肌が立って来た。

まさに、密室である。

タッタ二人きりで向き合っている、エレベーターの中では……。

「声を立てたって、外へ聞こえませんか？ ねえ」

と、青年はゆうゆうという。

彩子の心配をさきへさきへ、とよんで石を置いていくような、いい方をする。

「そういえば、イギリスで、エレベーター暴行事件ってありましたな。いや、冗談ですよ。僕が

そんな、——不良なんかに見えますか？ あほらし」

エレベーターは七階をすぎた。

「あんまりおどかささんという欲しいわ」

彩子は青年をにらみすえていった。

意外に愛嬌のある口元をしている男で、眼は色ガラスのおかげで煙って分らないものの、そんなにうさんくさいかげりはなさそうである。それはいいが、

「ハ、ハハ……いやしかし、女の子って、いつも、襲われたがっとなのん、ちがうのかいな……

そんなこと、おまへんか」

彩子は怒り心頭に発する眼つきで、青年を見て、何をいつてやろうかと思っているうちに、箱はトン、ととまった。

ドアへ体当りするような勢いでとび出した。何という、イヤラシイ男であろう。

世の男どもには、えてして、ああいう手合いが多いので、女一人、荒い波風に堪える白百合のごとく生きていこうというのは、まさに、至難のわざなのである。

彩子といっしょに暮らしている、町子にしろ、美紀にしろ、同じような被害を受ける、とこぼしている。

映画館の中では手をにぎられたりお尻をつねられたりする。

満員電車の中で、よろけられたり、手を廻して来られたり。

いちばん若い町子などは、いつかミナミの、「マタドール」という喫茶店で唄っている最中、ツバをかけられたそうである。

「くやしィて、涙出たワ」

と町子は泣いていた。

町子は可愛らしい美少女タイプの美人なので、しゃくりあげると、ほんとうに可憐だったから、彩子も美紀も、義憤の念に燃えた。

「どういうつもりやろ、けしからんじやないの」

彩子はかっかとして、

「喫茶店にねじこんだら、どないやのん?……」

町子はべそをかいた顔をあげて、

「ふん、支配人さんにいうたら、ニヤニヤして、それは町子ちゃんが可愛らしいさかいや、いわはった。そんで、みんなで声出して笑うねんよ。男て、イヤラシワァ」

といって、また、くやし泣きしていたものだ。

（ともかく、そういうサド的な、女の子をいじめて嬉しがる、いやがらせていい気持になる所があるらしいわ、男には――）

と思ひながら、彩子はできるだけ大股に廊下を歩いて、めざす部屋を探していた。うしろから、コツコツとゆっくりした靴音が聞こえる。

（あの男かしら？）

急に彩子はまた、気味悪くなった。

しかし、彩子をつけて来たとしても、あの黒メガネは、こんなマンションの廊下では何も手出しはできないはずである。

廊下から見下すと、市電もバスも通っており、大阪城は秋空にそびえ、すべて世は事もなしののどけさである。

声を出したら、平気だわ、と彩子は思つて「楠 正明」と標札の出た部屋のドアをノックした。うしろから靴音が近づいて来た。やっぱりあの黒メガネである。

「やあ」

と彼はズボンのポケットに手をつっこんだまま、

「そこ、僕とありますが、何かご用ですか」

という。

青年は金属片のキイホルダーを光らせながら、かずあるキイのなかの一つでドアを開けた。それから彩子を見返った。

「どうぞ」

彼の印象はさっきよりはまじめであつたが、どうもよく真意がつかめない。

それは黒メガネのせいかもしれないが、彩子は何となく、こんなヘンな男に今まで会つたことがないわ、^{ひまわり}と思ひ、自分のカンがいつものようにするどく働かないのが、くやしくてならないのであつた。

彩子は信濃橋の近くにある事務所でPR雑誌の編集記者をしている。

しぜん、たくさんの男や女に会う。社会的に地位のある人間もいれば、いいかげんな芸術家、チンピラもBGもいるわけだ。毎日、一人二人は未知の人間とつき合う勘定になるので、だんだん、人を見るときに、カンのようなものが養われて来たのだつた。

彼女はまだ二十三歳である。

だから、いくらカンが働いたつて、その範囲や厚みは知れたものである。自分でそう知つてゐるから、仕方がないけれど、それにしても、この青年は、何か、勝手がちがつて料理しにくい。

彩子は人に会つて、ものを頼んだり、断わつたり（もつとも、こちらから断わることはあまりなく、先方から拒否されることばかりであるが）するのがなめらかにいくように、いつか、可愛らしい気持のいい笑いを浮かべる技術を身につけていた。

それが、この青年の前に出ると、こわばつてしまつて、笑いさえとまどつて出てこない。

^{ひまわり}飄々としてゐるようで、抜けめなく、まじめそうでいて、オチヨクルようなところがある。

「どないしたんですか。僕とこに用があるのんところがいますか？」

青年は呆れたように、彼女をうながした。

「ホントに、楠センセでいらっしやいますか？」

彩子は念を押した。

「ハァ……ホンモノですが」

青年はうなずいて、

「何か、ふしんな点がありますか？」

と逆に質問して来た。

「いえ……でも……いつものお写真で見るとおヒゲが……」

と彩子は混乱しながら、思わず手で、あごを押さえて青年を見あげた。

「ああ、あいつはツケヒゲなんです」

青年はかばうように彩子を入れて、

「さて、いよいよ、密室ですな」

とニヤリとした。

つき当りがすぐ広間で、玄関でもあり、衝立を立てて仕事場にもなっているらしい。

正面の壁に大きく引き伸ばした写真がかかっていた。

黒々としたあごヒゲを形よく刈りこんで、厳肅莊重な面もちで、正面を凝視している男である。

上眼使いの三白眼で、教祖的な据わった眼である。端麗な容貌で、僧衣のような黒い布に身を

包んでいる。

「あんた、これで見えてたんですな」

青年は写真におや指をそらせ、その前にならんで、上眼でにらんで見せ、

「どや、似てまっしやろ、ホンモノだっせ」

闊達な大阪弁でからかう。

彼は現代のプレイボーイといわれているが、さすがに美しく見える角度もある。

「そうね、まちがいありませんわね」

彩子は肩をすくめて見くらべた。

「僕はもう、エレベーターの中から僕とこへ来たお客さんやな、思うてたんや」

「ハア」

「『みよしの』の仕事でしょう」

と雑誌の名をいって、写真の前に置いた机に腰かけた。

「ええ……電話でお願いいたしましたように、人生案内の回答者になっていただきたくて……」

彩子は、「みよしの」を二、三冊、とり出して机に置いた。

「最近のものでございます。こんど、身の上相談みたいな欄を設けたいと思ひまして……」

「身の下相談なら、僕、やりまっさ」

彩子は道徳的品位をいくらかはもち合わせていたので、聞こえないふりをして、

「ひと月に二通ほど、とりあげていただければよろしいんですの」

「どんなんが来まっしやろ、たとえば後家はんの再婚の相談とか、ハイ・ミスが夜歩きのくせがやめられん、とか……」

「お礼はまことに少なくて恐縮でございますけど……」

と彩子は、青年——いや、楠正明の言葉が耳に入らないようなふりをして、ビジネスの話を